慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 明治初期の漢文訓読と『文明論之概略』 |
| Sub Title | |
| Author | 古田島, 洋介(Kotajima, Yosuke) |
| Publisher | 慶應義塾福澤研究センター |
| Publication year | 1999 |
| Jtitle | 近代日本研究 Vol.16, (1999. ) ,p.141- 161 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19990000-0141 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十六巻（一九九九年）

# 明治初期の漢文訓読と『文明論之概略』

古田島洋介

本日は、慶應義塾の顔とも称すべき福澤研究センターにお招きいただきまして、まことに光栄に存じます。福澤諭吉に関する研究で立派な御業績をお持ちの方々に、私のごとき素人がお話を申し上げるのは汗顔の至りでございますが、御覧のとおり「明治初期の漢文訓読と『文明論之概略』」という題を掲げまして、近ごろ愚考しております漢文訓読表現の問題を申し述べ、福澤諭吉『文明論之概略』における漢文訓読表現の具体例をいくつか論じてみたいと思います。もし『文明論之概略』の読解について多少とも資するところあらば、望外の幸せでございます。

## 一　漢文訓読表現とは何か

さて、まず話の順序として、漢文訓読表現とは何か、その定義をはっきりさせておきましょう。もっとも、私

は厳密な定義を用意しているわけではなく、「漢文すなわち古典中国語の訓読に用いる言い回しを、そのまま日本語に持ち込んだ表現」程度にしか考えておりません。たぶん、定義としては粗雑の謗りを免れないかと思います。けれども、あまり厳密な定義を下してしまいますと、かえって重要な事例を取り落としてしまう懸念なしと致しませんので、目下のところはこのようにゆるやかに定義しておき、いずれ機が熟しましたならば、改めて厳密に定義しなおせばよいかと考えております。

漢文訓読表現の最も注意すべき点は、「外見すなわち発音・表記はあくまで日本語でありながら、その内実すなわち意味は漢文のままである」ということなのですが、のっけからわけのわからぬ話になると恐縮ですので、その点に関する話はのちほど申し上げることと致しまして、取りあえず訓読表現の具体例をいくつかお目にかけたいと思います。訓読表現の特徴を知るためには、韓国語と比較しますとなかなか有効ですので、併せてハングルをも掲げてみることに致しましょう。訓読表現とは、同じく漢文を取り入れながらも、韓国語とは異なる日本語独特の現象なのです。

傍若無人

我々日本人は、一般にこれを「ボウジャクブジン」と音読みします。言うまでもなく、これは日本漢字音で音読みしているわけですが、この点では韓国もなんら異なることはありません。やはり韓国漢字音を用いて「방약무인(バンヤクムイン)」と読みます。

ところが、漢字の発音として音読みしか持たない韓国語はそれで終わりですが、日本語には訓読みがあります

ので、我々はこの四文字の漢文に返り点と送り仮名を付けまして――

傍(ラニ)若(シ)レ無(キガ)レ人　傍(かたは)らに人(ひとな)無きが若(ごと)し

と読むこともできます。つまり、韓国語では漢文を音読みで取り入れることしかできないのに対し、日本語では、音読みのみならず、訓読みを用いた読み方でも取り入れることができるというわけです。そして、それをそのまま日本語のなかに持ち込んで、「彼の態度は傍若無人だ」とも言えるし、「彼の態度は傍らに人無きが若しだ」とも言えるのです。後者こそ私の謂う漢文訓読表現でありまして、管見によるかぎり、韓国語にはこれに相当する表現がございません。語順を組み替えて、漢字に自国語の意味すなわち訓を当てて発音する習慣がないのです。韓国語は日本語とほぼ同じ語順をとる言語ですので、せめて語順を入れ換えれば、さぞかしわかりやすかろうと思われるのですが。

こうした音読みと訓読の併用可能な表現が、日本語には少なくありません。やはり四字成語から例を拾ってみますと――

不即不離

これも、音読みで「A社とB社は不即不離(フソクフリ)の関係だ」とも言えますし、訓読して「A社とB社は即(つ)かず離(はな)れずの関係だ」とも言えるわけです。韓国語ではやはり「부즉불리(プチュクブリ)」と音読みするだけです。

また、次のような語も例に挙げてよろしいでしょう。

以心伝心

韓国語では「이심전심」と音読みするしかありませんが、日本語では、音読みして「そこがそれ、以心伝心（イシンデンシン）というやつさ」とも使えますし、訓読して「そこがそれ、心を以て心を伝ふというやつさ」とも使えるでしょう。もっとも、この四字成語を訓読して使った例を見かけたことはないという方が多いかと存じます。たしかに、私自身も「心を以て心を伝ふ」という言い方は耳にした記憶がなく、訓読すると音節数が多くなるため、なんとなくもたついた印象を否めません。言葉の経済性からして、音読みで通じるなら、音読みですませてしまうのが通例でしょう。

しかし、訓読という習慣を持つ我々には、音読み「イシンデンシン」のみならず、訓読「心を以て心を伝ふ」をも用いる自由があることは事実です。少なくとも、そのような可能性を我々は手にしているわけです。単純に一挙両得とは申しませんが、少なくとも、一つの表現に対して音読みの形と訓読の形の両者を用い得る可能性があることはたしかでしょう。つまり、日本語は訓読のおかげで表現の幅が広がっているのです。

もちろん、訓読形が常に成立するわけではありません。「思考」が動詞ならば「思ひ考ふ」と訓読して使うことも不可能ではないでしょうが、名詞となりますと「思ひ考へ」では通用致しますまい。漢字が並んでいるからといって、いつでも訓読表現が可能とは限らないのであります。

ただし、その逆に、音読みが通用せず、訓読のみが通用する場面があることも確認しておきたいと思います。

不得已

我々は専ら訓読形「已むを得ず」を用いて、この語を使っております。音読み「フトクイ」から念頭に浮かぶのは「不得意」の三文字と相場が決まっておりまして、決して「不得已」を想い起こすことはありません。韓国語がこの語をもやはり音読み「부득이」でしか用いない事実に想いを致しますと、いかに日本語が訓読によって表現を豊かにしているか、その恩恵がおわかりいただけることと存じます。

## 二　漢文教育の貧困と訓読表現に対する語感の鈍化

ところが、我々は訓読表現の恩恵を陰に陽にこうむっているにもかかわらず、近ごろ、訓読表現に対する認識がとみに薄くなってきているのではないかと懸念されるような状況に陥っております。その結果、訓読表現に対する語感も、大いに鈍くなってきているのではないでしょうか。これが杞憂に過ぎないのであれば、それに越したことはありません。けれども、どうも単なる杞憂とは思えないような事態が実際に生じているのです。

まず、訓読表現に対する認識不足の問題ですが、これは現今の漢文教育の貧困と決して切り離して考えることはできません。そもそも国語政策にしてからが、戦後、当用漢字なぞと称する代物を編み出し、字数は制限するは、字体は勝手に変えるは、訓読みは減らすはで、漢字殺しに余念がないのであります。当用漢字が常用漢字になったとて、たいして事態は改善されておりません。その結果、漢文を訓読するための漢字力・漢語力を日本人

は失ってしまったのです。時おり「常用漢字は一九四五字だが、『論語』も異なり字数で一五一二字しか用いていない」などという妄言を吐く人がいるので、実に困ります。『論語』の一五一二字が常用漢字の一九四五字に含まれているという保証はどこにもありません。また、謂うところの旧字体を今なお用いている台湾の発展ぶりを見れば、字体の簡略化になんの意味があるのかわかったものではなく、かえって漢文が読めなくなっただけ不便としか思えないのですが、慣れとは恐ろしいもので、字体を旧に復する動きは一向に見られません。さらに、訓読みを減らしてしまったため、今日の大学生には、たとえば「逐語訳」という言葉を口にしつつも、どのような意味かはっきりしていない者が多いのです。返り点と送り仮名を付けて「語を逐ふ訳」と訓読すればすむはずの話なのですが、その程度の訓読さえできない大学生が大半を占めるのです。「逐」の訓「おふ（おう）」が常用漢字表にないのですから、あまりにひどい話ではありませんか。

教育現場に目を移してみましても、高校ではろくに漢文訓読を教えておりません。なにしろ、教科書からして古典軽視が甚だしく、高校一年生の必修科目「国語Ⅰ」の教科書のページ数を調べてみますと、現代文が三分の二を占めるのに対して、古典は三分の一。漢文はさらにその三分の一というのが通例ですから、結局、漢文の教材は教科書のわずか九分の一に過ぎないのです。しかも、大学生に聞いてみると、漢文の教材をまったく教えようとしない教師もいるようで、なるほど予備校が頼りにされるのも宜なるかなでありましょう。大学でも漢文訓読を教えておりません。入試要項で、国語に「ただし、漢文は除く」と注意書きを添えるのは、近年、各大学が用いている姑息な常套戦法でありまして、漢文を出題しないことによって受験生が減るのを防止しようという意図なのですから、不見識の謗りを免れますまい。しかも、入学してからも、訓読を丁寧に教える学科は一つもなく、国文科は国語科教員免許状を取得させるのに必要なため、「漢文学」だの「漢文講読」だのと称する科目を

開設してはおりますが、担当教師はたいていが中文科の出身者ですから、内実は「中国古典文学」の授業とほとんど変わりなく、訓読については丁寧な指導が行なわれておりません。中文科は、現代中国語の学習に重点を置いて、古典までも現代中国語で発音してしまい、訓読の訓練には時間を割いていないのです。要するに、現在の日本の教育現場には、訓読をまともに教え授ける場所がどこにもなくなってしまったのであります。

その結果、どういう事態になったかは明らかでしょう。漢文訓読の素養が乏しいために、訓読表現に対する語感が鈍化してしまったのです。たとえば、久米邦武［編］『米欧回覧実記』に見える次のような例はいかがでしょうか。

人行ニテハ、十分時行ニテ僅ニ橋ヲ尽スヘシ

《岩波文庫》版第三冊、二三一頁第八行

少々わかりにくい文ではありますが、ちょっと考えてみれば、「人行ニテハ、十分時行ニテ」は、「人の足で歩けば、十分ほど歩いて」の意味だと理解できます。ところが、末尾の部分は、今一つすっきりしないのではないでしょうか。最後の「ヘシ」は濁点を省略した表記で、今なら「ベシ」と記すところだとはわかります。しかし、「僅（わづか）ニ……尽スヘシ」では、〈少しばかり……すっかり～してしまう〉意に響き、なにやら矛盾しているような印象を拭えないでしょう。気持ち悪いことこのうえない。

けれども、この「僅ニ」が訓読表現だと気づきさえすれば、つまり〈少しばかり〉の意味ではなく、〈そこではじめて／やっと〉の意味だと想い到りさえすれば、事は簡単です。要するに、「この橋は、人の足で歩けば、

十分ほど歩いてやっと渡りきれる（ほど長い）」意であります。「僅ニ」を「わづかに」と読んだとたん、つい我々は通常の日本語の感覚で、〈少しばかり〉の意味だと思ってしまう。ところが、先ほど申しましたように、訓読表現とは、発音・表記はどこから見ても日本語でも、その意味は漢文すなわち古典中国語としての語義にそって解釈しなければいけないのです。ここが漢文訓読表現の厄介なところであり、また注意を怠ってはならないゆえんであります。

もう一つ、同じく久米邦武［編］『米欧回覧実記』から似たような例を引いてみましょう。ダイヤモンドの研磨に関する一文です。

一沙粒大ノ石ヲ磨クコト、数日ヲ兼ネテ纔ニ成ル。

《岩波文庫》版第三冊、二五八頁第五行

やはり通常の日本語の感覚では、「砂一粒くらいの小さなダイヤモンドでさえ、数日を費やしても、ほんの少し磨き上がるだけだ」と聞こえるでしょう。ところが、前後の文脈をよく読んでみますと、この「纔ニ」も訓読表現で、右の「僅ニ」と同義だとわかります。つまり、正しくは「砂一粒くらいの小さなダイヤモンドも、数日を費やして、はじめて磨き上がる」と解釈すべきなのです。誤って通常の日本語の感覚で「……ほんの少し磨き上がるだけだ」と理解しても、それなりにもっともらしく聞こえ、なまじ意味が通じてしまうために、なかなかたちの悪い一文です。訓読表現に対する語感が鋭ければ、また訓読表現に対する注意が敏感に働けば、このような誤読は防げます。わかってしまえば、どうということもない。けれども、漢文教育が衰退し、訓読表現に対す

る語感が鈍った我々は、このような落とし穴があることすら知らずに過ごしているのが実情ではないでしょうか。むろん、一般の読者のみが訓読表現に対する語感を鈍らせているわけではありません。作家と呼ばれる人々でさえ、やはり誤解に陥ることがあるようです。野坂昭如『姦の研究』は次のような文章ではじまります。

ぼくは、すでにして、ほとんど性的不能者である。定命を過ぎること、七歳なのだから、「すでに」は余計とも思う。

野坂昭如『姦の研究』（講談社、昭和六十三年）七頁

問題は「すでにして」です。下文ですぐに〈「すでに」は余計とも思う〉と言い直しているのですから、野坂氏は「すでにして」を「すでに」と同義に用いているのでしょう。しかし、もともと「すでにして」の意味は「すでに」とは違います。「すでにして」は他ならぬ訓読表現であり、元来「既而」または「已而」を訓読した日本語です。場合によっては、「而」字がなくとも、「既」または「已」だけで「すでにして」と訓読することもあります。そして、その本来の意味は「その後まもなくして／しばらくして／そうこうするうちに」であり、「すでに」の単なる強調表現ではありません。漢字を用いて「既にして」または「已にして」とあれば、まだしも訓読表現かとの注意が働きやすいのですが、平仮名で「すでにして」と書かれると、警戒意識が薄れやすく、つい見逃してしまいがちです。〈純然たる日本語として、「すでにして」は「すでに」の強調表現として成り立つはずだ〉との意見もあるでしょう。そのような主張を認めるのに吝かではありません。けれども、「すでにして」が、それこそすでに現代の我々の耳に訓読表現として響かなくなっている事実だけは、きちんと認識しておきたいと

思います。

では、専門の学者ならば、さすがにこのような弊を免れているのでしょうか。残念ながら、そうではありません。すでに（「すでにして」ではない！）原田種成『私の漢文講義』に指摘されていることですが、原田氏が他界なさった今、その遺徳を活かす意味でも、どうしても重ねて指摘しておきたいことがあります。それは、鴨長明『方丈記』の冒頭に見える次の一節の解釈です。

知らず、生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰が為にか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。

書店で『方丈記』に関する注釈やら参考書やらを手に取ってみますと、たいていの書物が、この一節の二つの「知らず」を「強調のために倒置した表現」と解説しています。つまり、本来なら「……を知らず」とあるべきを、強調するために「知らず……」と記したものと見なしているわけです。

ところが、原田氏が指摘するように、このような解釈は訓読表現に対する認識不足に由来する誤読かと思われます。右の一節に見える「知らず」は訓読表現で、下文に疑問詞または選択表現などの不定の表現を伴い、「いったい……だろうか」という語気を表わすのです。ここでは、一つめの「知らず」に二つの疑問詞「何方」が付いており、二つめの「知らず」にも疑問詞「誰」と「何」が付いております。ですから、いずれもくだんの訓読表現と解し、この一節は「生まれては死ぬ人間という存在は、いったいどこから来て、どこへ去ってゆくのだろうか。また、仮の住まいにすぎないこの世で、いったい誰のために心を悩まし、何によって目を楽しませる

のだろうか」との語気に理解するのが正しいのです。詳しくは、原田氏の当該『私の漢文講義』を御覧いただきたく存じます。[1]

このように、一般読者も、作家も、そして専門家でさえも、訓読表現に対する語感が鈍化しているのが、今日の日本の実情です。それもこれも漢文教育がまともに行なわれなくなった結果であり、自国の名立たる古典作品や、つい百年ほど前の秀逸な外遊記録をきちんと読解できないとは、まことに情けない事態ではないでしょうか。ここに御臨席の皆さまにおかれましても、ぜひ漢文教育の衰退について憂慮の念をともにしていただければと存じます。

## 三　明治初期の漢文訓読

さて、では福澤諭吉が『文明論之概略』を刊行した明治初期の漢文訓読は、どのような様式で行なわれていたのでしょうか。細かい問題についてはここで述べる余裕がございませんので、簡単に要点だけを申し上げたいと思います。

一言で申せば、福澤の訓読は、音読みを多用し、逐字的に読む江戸時代の訓法を引き継いだものでした。話を早くすませるために、有名な具体例を挙げてみましょう。

大江匡房『江談抄』第四に、菅原道真の霊が自作の漢詩の二句を訓読してみせた話が見え、同じ話が『今昔物語』巻二十四第二十八話にも載録されております。いくら天神さまたる道真公とはいえ、その霊が現れて漢詩を訓読したというのですから、話の真偽は疑わしいものですが、往時の訓読がどのような様式であったかを手っと

り早く知るためには、なかなか便利な話です。道真公の霊は、自作の漢詩の二句「東行西行雲眇眇、二月三月日遅遅」を次のように訓読してみせたのでした。

東行西行雲眇眇　とさまにゆき　かうさまにゆき　くもはるばる
二月三月日遅遅　きさらぎ　やよひ　ひうらうら

平仮名ばかりで記したのは、訓読みであることを示すためです。御覧のとおり、一つも音読みがございません。また、漢字を逐字的に訓読するのではなく、「東…西…」をにらんで「とさま…かうさま…」と訓じ、「二月」「三月」の各二字に「きさらぎ」「やよひ」の訓を当てています。「眇眇」「遅遅」も、それぞれがそのまま発音されるわけではなく、いかにも和語らしい擬態語「はるばる」「うらうら」が当てられております。まことに優雅な訓読で、『江談抄』が著された平安末期、さすがは道真公と思わせるだけの説得力を備えていたのでしょう。逆に申せば、当時、すでにこのような訓読が行なわれなくなっていたのかとも推察されますが、ともあれ、往時の訓読はこのような訓法を一つの理想とするものでした。

ところが、右の二句に江戸時代の主流を占めていた訓法を用いてみますと――

東行西行雲眇眇　トウカウ　セイカウ　くもベウベウ
二月三月日遅遅　ジゲツ　サンゲツ　ひチチたり

片仮名は音読み、平仮名は訓読みです。右に引いた道真公の霊の訓読と比較してみれば、その相違は一目瞭然でしょう。やたらに音読みが多く、逐字的に発音しているだけです。あまりに無粋な訓読ですが、事実ですから致し方ない。明治時代の訓読も、基本は江戸時代と大差ありません。福澤も音読みを多用し、逐字的に読んでいたのです。このうち、特に逐字的な読み方は、次節以下で申し上げる話にも関係してきますので、ちょっと念頭に置いていただければと存じます。

ただし、明治初期は、未だ学校教育が普及しておらず、統一的な訓法が存在していたわけではありません。音読みを多用し、逐字的に読むのが基本とはいえ、訓読者によって訓法が異なる場合も少なからず、返り点をはじめとする訓点の用法にも訓読者個人の流儀に左右されるところがありました。こうした不統一がありますと、学校教育の現場では何かとばらつきが出てきて困るため、明治も末期になって、大まかながらも、ついに訓法・訓点等の統一が図られました。それが明治四十五年三月二十九日付官報（no.8630）に掲載された「漢文教授に関する調査報告」です。今日、この福澤研究センターがございます慶應義塾の図書館旧館は、時あたかも明治四十五年四月に竣工したとの由ですから、漢文訓読の様式がほぼ統一されて以来の年数と同じ歳月を閲しているわけです。関係者の皆さまは、この図書館旧館を目になさるたびに、ぜひ漢文訓読の歴史にも想いを馳せていただきたいと思います。もっとも、これから話題に上せます『文明論之概略』は明治八年の刊行ですから、そのような統一された訓読様式と直接には関係がありません。福澤が今日の訓法といささかずれた訓読をしていた例は、のちほどお話し申し上げることに致します。

## 四　『文明論之概略』訓読表現拾遺

いよいよ福澤『文明論之概略』の訓読表現に関する話でございますが、実はかつて拙稿に多少の事例を記したことがありますので、重複は避けたいと思います。[2] ここでは、その拙稿に取り上げなかった訓読表現をいくつか挙げ、福澤の訓読表現を今一歩広く観察してみましょう。もっとも、次のような例では当たり前すぎて興ざめかもしれませんが。

請う、試にこれを論ぜん。

《岩波文庫》版／松沢弘陽［校注］『文明論之概略』八八頁第四行

漢文の原文に復原すれば、「請（ヲ）試（ミニ）論（ゼンレ）之（ソ）」となるでしょう。「請ふ……Vせん」ですから、動詞Vの主語は書き手の福澤自身です。「請ふ……Vせよ」と訓読すると、動詞Vの主語は福澤が呼びかけている相手の読み手になりますが、まあ誤解の余地はないでしょう。実は『文明論之概略』の英訳がこの一文を訳出していない[3]ので、なるほど英語ではこのような字句を記さないものなのかと面白く思ってお目にかけただけです。訓読表現としては最も容易に解釈できる部類に属しますから、特に注意する必要もないでしょう。

次に、福澤が逐字的な訓読を行なっていたことをうかがわせる例を一つ挙げてみます。

既に已に地を払て、

《岩波文庫》版／松沢弘陽［校注］『文明論之概略』一七七頁第五行

やはり漢文の原文に復原してみれば、「既已払地」となるでしょう。「すでにすでに」はいかにも奇妙な日本語ですが、漢文訓読では「既已」の逐字読みとして十分に許容される訓法です。もちろん、日本語としての不自然さを避けるべく、「既已払地」と訓読する方法もあります。「既已」は同義語の反復なのですから、一度だけ「すでに」と読めば、意味の表出という目的は達せられるわけです。しかし、福澤はそのような訓法を用いていなかったらしい。日本語としての不自然さには意を介さず、あくまで一字ずつ語を逐うことを原則として訓読していたものと推測されます。

ただし、「請ふ……Vせん」と同様、「既已」にも誤解の余地はないでしょう。訓読表現であることをわきまえていれば安心して読めるという程度の言い回しにすぎず、取り立てて訓読表現だと騒がずとも、理解に支障はありません。

けれども、次のような例となると、どうでしょうか。

教る人の得て関すべきにあらず。

《岩波文庫》版／松沢弘陽［校注］『文明論之概略』一三四頁第一一行

先の二例と同じく、漢文に復してみれば、「非教人可得而関」となるでしょう。さして難しいわけ

ではありませんが、なんとなく「得て」（得而）がすっきりしないのではないでしょうか。すでにいくつか訓読表現をお目にかけましたので、この「得て」を「手に入れる」意だと思う方はおりますまい。けれども、いざ明確な答を求められると、少々とまどいを覚えるかもしれません。

実は、この「得而V」という形は、単に「得V」と記しても、意味のうえでは異なりません。ただし、「得」の直前に否定詞「不／無／莫」や「不可」または助動詞「可」などがありますと、「得」の下に「而」を入れて書くことが少なくないのです。つまり、右の一文では、「可」が冠せられたために「得」が「得而」に変形されたものと考えておけばよく、「教える者が関係できるような問題ではない」との意になります。「可」も「得」も可能を表わす助動詞ですから、あたかも動詞のような訓読表現「得て」に惑わされさえしなければよろしいのです。

福澤の文章を正確に解釈するために、わざわざいったん漢文に直してみるとは、いかにも奇妙な手続きですが、それが訓読表現というものの性質なのですから仕方ありません。くどいようですが、訓読表現とは、発音・表記は日本語でありながら、意味はあくまで漢文すなわち古典中国語によるという面従腹背の存在なのです。ですから、その正体をあばくには、どうしても漢文への復原が、少なくとも漢文に復原した姿を想像することが必要というわけであります。

もっとも、漢文に復原しても誤解しかねないような厄介な訓読表現もあります。節を改めてお目にかけることに致しましょう。

## 五　使役形と仮定形

『文明論之概略』を読んでおりますと、しばしば「～をして…せしめなば」という表現が目にとまります。具体例を挙げてみますと――

もし人類をしてその天性を全うするを得せしめなば、

《岩波文庫》版／松沢弘陽［校注］『文明論之概略』一四七頁第五行

果たして、このような表現が読者全員に正確に理解されているのかどうか、少しく心もとない感を拭えません。なぜなら、「～をして…せしめ」と聞けば、だれもが漢文の使役形を思い出すだろうと考えるからです。それはそれで、間違いではありません。実際、漢文の使役形は次のような訓読形式を採ります。

使（ム）N（ヲシテ）V（セ）　　NをしてVせしむ

語順は英語の使役形 make someone do とまったく同じです。使役の対象に「をして」を付け、使役の助動詞に「しむ」を使うことさえ忘れなければ、この句形そのものに別して難しい点はありません。

ところが、厄介なことに、この使役形がほとんどそのまま仮定形に転用されることがあるのです。その訓読形

式は次のようになります。

使(メバ)　N　V(ンデ)(セ)　Nをして V せしめば

これは英語の if someone does に相当する表現なのですが、御覧のとおり、右に記した使役形とほとんど変わりありません。異なるのは「～しめば」となる点だけです。つまり、ただちに御承知いただけるとおり、漢文の使役形と仮定形は実に紛らわしい形をしているのです。

もちろん、このような紛らわしさを回避する訓読形式もあります。仮定形としての意味の表出に意を用い、あたかも使役形さながらの読み方を消し去ってしまうわけです。

使(シ)　N　V(セバ)　使(も)し　N　V せば

これなら仮定形であることは明らかで、使役形と紛れる惧れはありません。けれども、仮定形であることを明確に打ち出すこの種の読み方は、ごく最近の訓法です。我々にとっては頭痛の種ながら、福澤は旧来の訓法、すなわち使役形をそのまま仮定形に転用した紛らわしい訓法を用いているのです。それが『文明論之概略』にしばしば現れる表現「～をして…せしめなば」に他なりません。つまり、先に挙げた「もし人類をしてその天性を全うするを得せしめなば」に使役の意味はなく、一見たしかに使役形のように見えるけれども、意味はあくまで純然たる仮定形に解し、「もし人類がその天性の智徳両面を完璧にすることができたならば」の意に理解しなけれ

ばいけないのです。なんとも厄介なのですが、事実なのですから仕方ありません。

ここで福澤の「～をして…せしめなば」について、二つばかり補充説明を付け加えておきたいと思います。一つめは、ふつうの訓読なら「～をして…せしめば」となるところに、福澤が「な」を加えていることです。これが福澤個人の読み癖なのか、あるいは福澤が漢文を学んだ師の読み癖を踏襲したものなのかは不勉強にして未詳ですが、とにかく「な」を添えて訓ずるのが福澤の特徴です。この「な」は、文法的には完了の助動詞「ぬ」の未然形であります。もっとも、意味に重大な変化が起きるわけではありません。「…するならば」に完了相が加わって、「…したならば」に変わるだけです。日本語文法の専門家に言わせれば、重大な変化かもしれませんが。

二つめは、特に知らずともよいことですが、もともと再読文字として扱われていた使役の「使」を再読しないことに統一したのは、前掲の明治四十五年三月二十九日付官報（no. 8630）所載「漢文教授に関する調査報告」においてのことです。[4] したがって、福澤は使役形はもちろんのこと、それを転用した仮定形においても、次のように「使」を再読文字として訓読していた可能性が低くないかと推測されます。

使（シテ）N（ニ）V（セ）　　NをしてVせしめば[5]（しめば）

「使」を再読文字として扱おうと扱うまいと、訓読の結果に変わりはありませんので、さして神経質になる必要はありませんが、念の為に付け加えておきたいと思います。

では、福澤が「もし～をして…せしめなば」と記したときは、あるいはそれに類似する表現を用いたときは、必ず純然たる仮定形だと決めてかかってよろしいのかとなりますと、これがなかなか複雑で、一筋縄ではゆきま

せん。実はこの問題についても拙稿を綴ったことがあり、それが機縁となって今日ここにお招きいただいたわけであります。詳しくは、当該の拙稿を御覧いただければと存じます。[6]

## 六　むすび

以上、漢文訓読表現について述べつつ、福澤『文明論之概略』の訓読表現にまつわる注意点などを指摘してみました。むろん、これは福澤『文明論之概略』に限らず、明治～大正時代の漢文訓読表現を用いた文章すべてに当てはまる話でございます。たまたま『文明論之概略』を素材にしただけですが、他の書物をお読みになるさいにも、もし何か御参考になる点がございますれば幸いに存じます。

なお、本日は、漢文訓読において、なぜ「既已」のごとき不自然な日本語を平気で用いてきたのか、どうして使役形をそのまま仮定形に転用するような紛らわしい訓法を採ったのかという類の本質的な問題については、一切ふれませんでした。このような現象の背後に漢文訓読という営為の正体が隠されているものと愚考するのですが、もし御興味のある向きがございましたら、すでに多少の拙稿を物しておりますので、お手すきのさいに御笑覧いただければと存じます。[7]

本日は、週末のお疲れにもかかわらず、夜遅くまで御臨席を賜りまして、まことにありがとうございました。各位の御清聴に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

＊平成十一年十月二十九日（金）慶應義塾（三田）福澤研究センター［主催］一九九九年度第三回「金曜セミナー」

## 注

（1）原田種成『私の漢文講義』（大修館書店、平成七年）六一～六九頁。

（2）拙稿「福沢諭吉の文章と漢文訓読――『文明論之概略』を素材として」／「福澤諭吉年鑑」二四（平成九年十二月）。

（3）Fukuzawa Yukichi, *An Outline of a Theory of Civilization*, trans. by David A. Dilworth and G. Cameron Hurst, Sophia University, Tokyo, 1973; p.55, l.4.

（4）当該「漢文教授に関する調査報告」の「返点法」注意第二および「添仮名法」第七末尾に、「使」の訓法に関する措置が記されている。

（5）レ点と二点が同居するこの返り点の付け方は、現行の返り点法では不可とされる。

（6）拙稿「使役か仮定か――福沢諭吉『文明論之概略』の仮定表現」／「比較文学研究」第七三号（平成十一年二月）。

（7）拙稿「漢文訓読の〈割引率〉――記憶術としての定位」／明星大学紀要「日本文化学部・言語文化学科」第五号（平成九年三月）。

拙稿「暗記できればまずはよし――〈漢文訓読＝記憶術〉論の検証」／明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集・第一輯『普遍文明と民族文化――言語現象・造型表現・文明論の領域――』（［編集責任者］小堀桂一郎、明星大学日本文化学部、平成十年三月）。

拙稿「〈漢文訓読＝記憶術〉論　再検証」／明星大学紀要「日本文化学部・言語文化学科」第六号（平成十年三月）。

拙稿「〈漢文訓読＝欠陥翻訳〉論への反論――伝統的訓法に対する〈改良〉を駁す」／明星大学紀要「日本文化学部・言語文化学科」第七号（平成十一年三月）。

（こたじま　ようすけ　　明星大学（青梅）日本文化学部言語文化学科助教授）